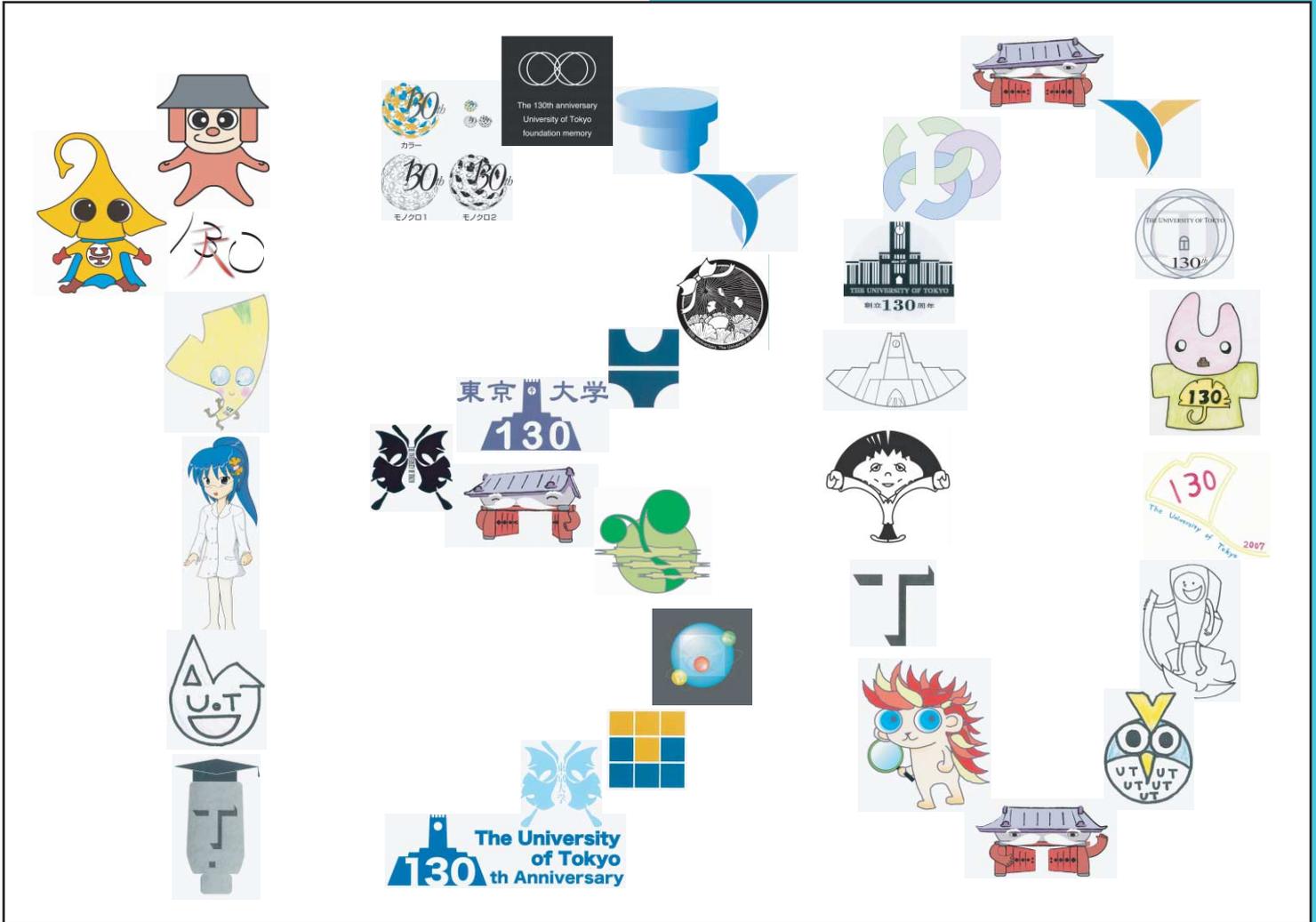


学内広報

for communication across the UT



特集：

創立130周年記念事業

シンボルマーク&キャラクター応募作品紹介



2007.1.31

No. 1351



本学では昨年、創立130周年記念事業のシンボルマークとキャラクターが公募され、130周年記念事業準備委員会による審査の結果、入選作品が決まりました。今回の学内広報では、残念ながら入選しなかった他の作品もご紹介します。前号のインタビューでも濱田理事から「集まってきたマーク・キャラクターの解説がとても良いですよ。東大にとって大事なことは何かをそれぞれ考えて書いてくださっているから」との発言がありました。力作の数々をお楽しみください。
(紙面の都合上、1次選考を通過した作品を掲載します。多数のご応募ありがとうございました)

キャラクターの部

入選



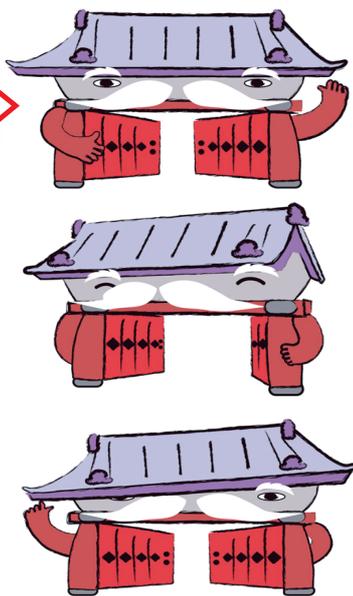
Gustoff(ガストフ)

作:宮崎 彩さん

<コンセプト>

130年という長い歴史の中で常に日本のトップに居続けてきた東京大学ですが、これからはさらなる飛躍を望まれています。グローバル化や世界との競争の中で、これまでの伝統(いちようで表しました)ののっとなってさらなる飛躍となる、世界の“gust of wind”となるような、明るい未来を示すキャラクターにしました。伝統の上に成り立つ東大の新しさを描きました。

入選



赤門爺(あかもんじい)

作:溝口 照康さん

<コンセプト>

国の重要文化財であり、東大のシンボルでもある赤門をモチーフにしたキャラクターです。古くからその門を開いて、来る人を迎え入れる威厳ある姿、それでいてあたたかい雰囲気表現しました。

入選



U-Tan(うーたん)

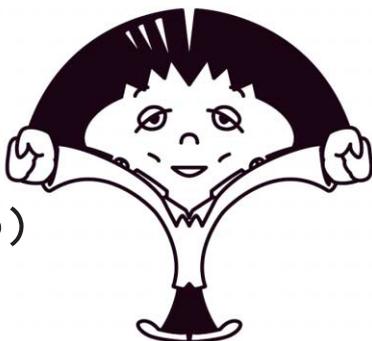
作:市村 桃子さん

<コンセプト>

「University of Tokyo」のUTをキャラクターにしました。顔が「U」、体が「T」を文字ったウサギの『U-Tan』です。口は安田講堂の形を簡略化し、体の真ん中には、東京大学のシンボルであるイチヨウを描きました。ウサギのイメージカラーであるピンクと、自然豊かなキャンパスをイメージして体のT部分を黄緑にしました。みんなに愛され、身近に感じてほしいと思い『U-Tan』(うーたん)と呼びやすい名前をつけました。

光太郎
(こうたろう)

作:中洲 俊信さん
本多 正徳さん



<コンセプト>

東大生のイメージを、イチヨウの葉型と重ね合わせたデザイン。丁寧に整えられた髪形には「真面目さ」が、幼さの残る顔には「純粋さ」が表現されている。一方で、元気に伸ばされた両手には、決して現状に安住しない「チャレンジ精神」が込められている。取り繕わない東大生イメージには多くの人々が共感し、東大学生・東京大学をより身近に感じることであろう。

チテキ・コーキン

作:鎌田 直子さん

<コンセプト>

大きな目で身の回りの小さな不思議も見逃さず、大きな耳であらゆる情報を聞き逃さない、そんな知的好奇心をもったキャラクターです。青い瞳は冷静に物事を考える姿勢を、赤い髪は奥に秘めた知の探求への情熱を表します。広く多くの人に今回の事業に興味を持ってもらうきっかけになるように、堅苦しさや東大の持つ敷居の高いイメージを無くしたデザインとしました。





優帝(ゆうてい)

作:首藤 里美さん

<コンセプト>

一般的に「知」を象徴するふくろうをキャラクターに選びました。眉間の羽は銀杏をモチーフにしました。大きな瞳で未来を見通します。からだの羽並みを「UT」で表わしました。



ユーティ

作:首藤 里美さん

<コンセプト>

耳が「知」の字を表わしています。「UT」で目元の表情を表わしました。特に若い人に受け入れられることを意識して、かわいらしく作りました。親しみやすさを感じてもらえたいと思います。

ひとみちゃん

作:得居 誠也さん

<コンセプト>

国立大学法人となって今までより自由に動くことができるようになったことをふまえ、変化としての「新しい方向性」と、国立大学法人となっても変わらない「国内最高峰の大学」という2点を考えて描きました。銀杏の飾りと淡青色の髪は東京大学を表しています。女性のキャラクターであることには、今現在まだまだ男性の比率が高い東京大学に、より多くの女性が関心を持ってくれればという願いを込めています。



UT ユーティ

作:相川 光子さん

<コンセプト>

キャンパス・ツリーの銀杏をモチーフに名前をUT(ユーティ)にしました。大きな頭は英知で膨らみ、学術を俯瞰する大きくよく動く瞳、さまざまな課題に取り組む開いた手、閉じた手は強固な意思、スリムな体と俊足で、瞬時に、機敏に活動し、黄金に光り輝き、周りの人々に勇気、喜び、活力を与える。

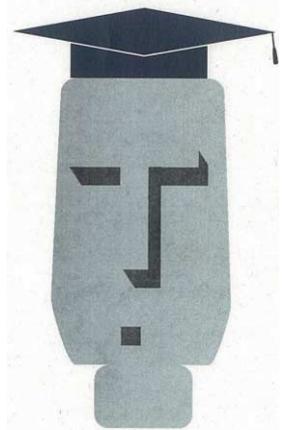


アカモン (「ア」にアクセント)

作:遠藤 暢雄さん

<コンセプト>

このキャラクターは説明するまでもなく「赤門」がモチーフです。東大といえば「赤門」。語感もよく、なにしろシンプルすぎるがゆえにインパクトがあり、絶対記憶から消し去ることができません。さらに、小学生でも大人でも、だれでも真似て描けることを念頭に作成しました。



TT(ティーティー)

作:丸山 真一郎さん

<コンセプト>

東大の頭文字「T」をモチーフにした顔を持つモアイ像に似た石像。石のように固い意志を持ち、130年先を見据える視野を持った大学運営を目指すことを表現しています。



ゆーとくん

作:松居 和広さん

<コンセプト>

ゆーとくんは知の戦士。東京大学のシンボル・銀杏アタマに好奇心いっぱい目、UTマークを胸に、大学カラーの青いマントをまとって世の中のあらゆる問題に勇敢に立ち向かいます。その姿は、若者の好奇心と情熱を原動力に、継続的な知の探求と蓄積で人類社会に貢献する東京大学の姿勢そのものです。かわいらしい末広がりの銀杏アタマは、知から広がる人類の発展を示すと同時に、社会から親しまれる大学像を表します。

シンボルマークの部



カラー



入選



モノクロ1



モノクロ2

作:丸尾 圭祐さん

<コンセプト>

東京大学のシンボルである銀杏の葉をベースとし、学問の世界を包み込むスケール、さまざまな学問分野の連関、独立性、外の世界に開かれた様を表現しました。モノクロで印刷された場合の可読性にも配慮しました。



作:中村 祥子さん

<コンセプト>

コンセプトは、陽光に向かって芽吹くイチヨウです。

イチヨウは、東京大学の象徴であり、また、現存最古の植物として、東京大学の、由緒と伝統を顕わしています。

そして、芽吹く三枚の葉は、国立大学法人化に伴い「第三の創業」を迎えた東京大学の、新生と未来に向けた可能性を示しています。

最後にリボンで、百三十周年を歓迎する気持ち添えました。



作:鎌田 直子さん

<コンセプト>

知の頂点を目指して高く、そして無限に広がる知の世界を自由に舞う姿を蝶に重ねて表現しました。また、蝶は美しく変貌を遂げることの象徴でもあり、130周年にあたる東大の展開期を表す良いシンボルだと思います。

蝶の羽根はイチヨウをモチーフにし、130年の歴史の中で先達の培ってきた知の基盤・伝統を重んじる心を表しました。



作:小石澤 泰子さん

入選

<コンセプト>

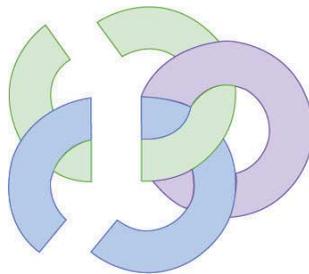
外形を形成する3つの輪は本郷・駒場・柏という新時代の東京大学三極構造を示す一方、新時代における「人」と「人」、また「社会」と「大学」という関係の重要性を示すものでもある。後者に関しては、中央に位置するUTの文字(Uは逆転させている)を人と人が手を取り合っているようにみせることでも表現している。さらに、中央に存在する扉は未来への扉を意味し、東京大学が新時代に未知のステージへと挑戦しようとしていることを示している。



作:南野 淳さん

<コンセプト>

130周年を表す意味で「130」の数字を東京大学が取り組む様々な「知」という文字を描き、目指すべく「知の頂点」と言う意味で「天」浮かぶイメージを考えました。



作:本田 健一さん

<コンセプト>

「知の再編成に伴う大学の使命とその先にある世界」

三つの輪は知の三層構造と大学の三層構造(学生・教員・職員)を表す。また、青と緑の輪は地球を、紫は人類の叡智を表現している。不完全な輪は世界が知の再編成の道程にあることを示す。また、その輪を完成させる使命が東京大学にあり、最後のピースが埋まったときに三つの輪は完成し、新たな世界が開かれることを暗示する。全体では「130」という数字をイメージしている。



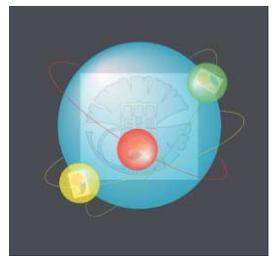
The 130th anniversary
University of Tokyo
foundation memory

作:筑紫 一夫さん

入選

<コンセプト>

二つの円の重なりが、東京大学と社会との関わり合いを表し、その関わりの中から生まれる無限の可能性を(∞)をモチーフにデザインしました。シンメトリーなフォルムは、人や社会、研究に対して誠実に向き合う東京大学の姿勢を表現しています。



作:長門石 暁さん

<コンセプト>

三極構造の新体制のもと、今まさに世界へ再進出しようとする新東大を象徴すべく、3軸、本郷(赤門をイメージした赤球)・駒場(シンボル銀杏をイメージした黄球)・柏の葉(自然、環境をイメージした緑球)が、青球(世界、いわゆる地球を表し、また東大のスクールカラーでもあるので、東大の歴史・英知が詰まった旧マークが中にあり、東大が世界の基盤となることも意味する)を囲み、地球規模・宇宙規模な展開を魅せる意志を表す。

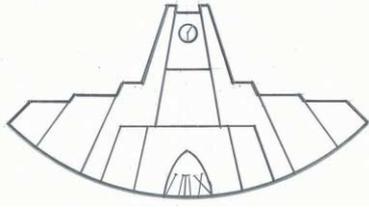


作:横田 幸子さん

<コンセプト>

「東京大学」というブランドを、いかに人々の心にアピールしていくか。今回、アイコンにふさわしいと思える安田講堂を簡略化し、デザインモチーフとした。

シンプルかつ人々の印象に残るイメージを目指した。



作: 山田 文男さん

<コンセプト>

東京大学のシンボルは、本学関係者のみならず多くの人もご存知で、登録文化財にも指定されている安田講堂でしょう！このシンメトリーな建物をモチーフにして、扇形のシンボルマークを考案した。建物の基礎は丸く(みんな仲良く)、ファサードの縦の線を強調して頂点に向かう直線(大学も頂点を目指して精進する)に描いた。時計の針は1時30分(130)を指し、入り口にもローマ数字でⅠ、Ⅲ、Ⅹ(130)を表示した。

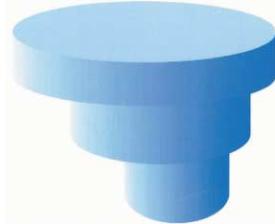
東京大学

作: 対比地 大輔さん



<コンセプト>

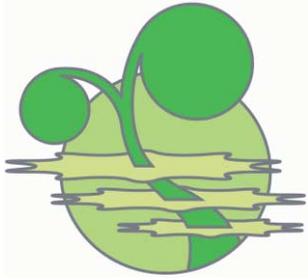
安田講堂をモチーフにして、130年の歴史の重みを感じさせる安定感のある配置にした。安田講堂はバースデーケーキに見える。時計の文字盤が東大のコミュニケーションマークになってお茶目である。



作: 市川 玲子さん

<コンセプト>

TOKYOの“T”を、円柱が重なりあってあらわしています。130年の積み重ねをイメージしました。その積み重なった歴史を土台として、より高い場所をめざす東京大学の姿を表現したいと思いました。



作: 遠藤 暢雄さん

<コンセプト>

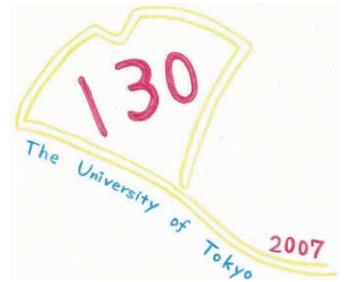
このマークは東京大学の知(3枚の横長の模様)を縦断することにより「知の構造化」を実現する、新たな「総合知」の萌芽が芽(外側の○)をも超えて飛び出す力強さを表しています。また3枚の横長の模様には10個の緩やかな突出がありますが、これは10の学部になぞらえています。さらには3枚＝「第三の創業」の意味をもたせています。



作: 市川 玲子さん

<コンセプト>

東京大学の「T」の文字と銀杏の葉をイメージしたデザインです。また、過去の歴史、知の積み重ねをもとに、未来に大きくその成果が開花し、進化しつづける様子表現しました。青を基調としたものと、東大のシンボルマークの色あいをもとにしたデザインを作成しました。



作: 山根 雅子さん

<コンセプト>

このマークで銀杏を形作っている線は東大の130年間にわたる歴史を表しています。この線の始点は閉じられていますが、終点は開かれたままになっています。これは、130周年は通過点であり、東大の歴史はこれからも続いていくことを示しています。また、このマークには3つの色が用いられています。これは長い歴史に培われた東大の知、将来を担う若者、取り巻く社会を表しており、この三者が1つになることをイメージしています。



作: 丸山 真一朗さん

<コンセプト>

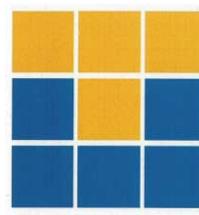
東大の頭文字「T」を表すとともに、どことなく透徹した視点をもった人物の表情を併せて表現している。



作: 丸山 真一朗さん

<コンセプト>

東大の頭文字「U」と「T」を、どことなく親しみのあるアイコンという形で表現している。



作: 丸山 真一朗さん

<コンセプト>

東大の頭文字「U」と「T」を、東大のシンボルカラーの青と黄を配したシンプルな図形の組み合わせで表現し、安定した共同体の成長を象徴している。また、三四郎池に銀杏の葉が舞い散る様として見る事も出来るようになっている。

力作の数々、いかがでしたか？応募者それぞれの「東京大学」に対する思い入れが見てとれたと思います。学生、教職員がそれぞれの立場で教育・研究に携わりながら、多様な姿を見せる「東京大学」に、いろいろな思いを持って過ごしているのでしょう。この130周年を機に、さまざまな企画を通して、また日々の仕事のなかで、それぞれの「東京大学」を考えてみてはいかがでしょうか。

問い合わせ先：
創立130周年記念事業事務局
E-mail: 130out@adm.u-tokyo.ac.jp

※ 応募作品は「130周年記念事業シンボルマークコンセプトブック(仮称)」で紹介する予定でしたが、本誌をもってコンセプトブックにかえさせていただきます。

NEWS

部局 ニュース



大学院教育学研究科・教育学部

留学生見学旅行報告

部局

秋の留学生見学旅行は本研究科の恒例行事。この旅行を楽しみにして、毎年のように参加する留学生も多いと聞く。今年度は、前日の嵐がうそのように晴れ渡った10月25日（水）秩父への日帰りバス旅行を行った。参加者は42名であった。

昼前に荒川村のそば打ち道場に到着。数人のグループに分かれ、ボランティアの方の指導を受けてそば打ちに挑戦。苦労してこねたそば粉を薄く伸ばしてたたみ、精神を集中して包丁で細く細く切る。自分たちで作ったゆで立てのそばの味は格別であった。



そば打ちに挑戦

秩父神社を参拝した後、地元の造り酒屋・武甲酒造を見学。酒造りへの情熱が伝わる社長さんの説明をうかがった後、そこで作られているいろいろな種類の酒の利き

酒をさせてもらった。



秩父神社の前で

最後は長瀨の川下りを楽しむ。前日の雨で増水しており、通常の所要時間30分のところを半分の15分で流れ下るといふ、スリル満点の川下りであった。



川下り

盛りだくさんのプログラムで、赤門前に到着したのは19時近かった。留学生同士が研究室を越えて交流する上でも、また留学生が日本の生活文化に触れる上でも、意義のある一日であったように思う。

大学院教育学研究科・教育学部

学校高度化専攻のための教員と大学院生との打ち合わせ、附属学校で実施

部局

今年度、教育学研究科で学校教育高度化専攻が新設されたのに伴って、中野区にある附属中等教育学校で、昨年11月27日、大学院生と教員との打ち合わせが初めて開かれた。この日、全附属教員と大学院生が実験実習室1で顔合わせを行った後、各教科に分かれて打ち合わせが行われた。教員と大学院生は初めて顔を合わせるケース

がほとんど。教員たちは、各大学院生の取り組んでいるテーマと、附属学校で具体的に何がやりたいかを聞いた。

これまで学部生の教育実習を受け入れてきた附属学校が、来年度から高度化専攻の実地研究の場になる。今回の打ち合わせ会は附属学校にとって新しいステップと言えるだろう。

この打ち合わせ会に参加した社会科の大学院生の一人は、「附属学校の先生方は、授業をオープンにすることを前向きにとらえており、カリキュラム開発や教材研究の相談にも積極的に対応してくださる。比較的長い時間をかけて実地研究ができるのも、貴重な経験になるので感謝している」と述べた。

また、このプログラムを推進している佐藤学前教育学部長は、「附属学校が、トップレベルの教師教育に、大学と合同で着手したのは画期的なこと。院生達の今後の頑張りが楽しみ」と話した。

現在、附属学校には毎日のように大学院生が訪れ、授業見学を行ったり教員と話し合ったりしている。来年度からの彼らの活躍に注目したい。

らおうという企画である。中高生から年配の方まで多くの人たちが残って各講師を取り囲み、双方向のコミュニケーションをとれるめったにない機会を楽しんでいたようだ。コーヒーやお菓子も用意され、和やかな雰囲気ですら終了時間も忘れて会話に花が咲いていた。

当日は天候にも恵まれ、予想をはるかに上回る聴衆に会場いただいた。とくに社会人の参加が多かったが、今後の課題としてはより若い層の人たちにも発信していきやすい工夫も必要かと思われる。最後に、企画と準備、実行に携わった学生および職員の方々に、この場を借りて感謝の意を表したい。



横山祐典講師（地球惑星科学専攻）の講演の様子



武田洋幸教授（生物科学専攻）の講演に聞き入る聴衆

大学院理学系研究科・理学部
第10回理学部公開講演会
「時間の科学」開催される

12月2日（土）、第10回理学部公開講演会が本郷キャンパス安田講堂にて開催された。今回はテーマを「時間の科学」とし、時間をキーワードに理学系研究科で行われている研究を紹介する企画とした。これまで秋の講演会は金曜日の夕方に開催してきたが、今回はじめて土曜日の昼の時間帯で行った。これまでを大きく上回る600名近い聴衆に会場いただき、一般向けの講演会としては大成功だったといえるだろう。

まず地球惑星科学専攻の横山祐典講師による「地球環境変動と年代測定」、続いて生物科学専攻の武田洋幸教授による「動物のからだを刻む分節時計」の2講演が行われた。最後に、第10回記念特別講演として、海部宣男国立天文台名誉教授に「ひろがる太陽系：惑星の新しい定義をめぐる」と題して、最近話題となった惑星定義の問題についてお話しいただいた。異なる分野からの講演であったが、いずれも平易でわかりやすい内容で、基礎科学の多様性と面白さを十分に伝えることができたのではないと思う。

今回の講演会では、土曜開催にしたこと、記念講演を設けたことなどいくつかの新しい試みがあったが、もうひとつの目玉として設定したのが、講演会終了後の講師との「歓談の時間」であった。講演終了後希望する参加者に残ってもらい、講演中の短い質疑時間では解消されなかった質問や日頃の疑問などを直接講師にぶつけても

12月11日（月）農学部弥生講堂において、生物生産工学研究センターシンポジウムが210人の参加者を迎え、盛会のうちに終了した。

本センターは、微生物、植物の有用機能を解析・増強するバイオテクノロジー研究を強力に推進し、その成果を環境修復、不良環境地域での作物生産、省エネルギー・環境低負荷型食糧生産に関連する技術開発に応用することを目的としていることから、今年のテーマは「微生物力を活用したものづくりに向けて」に設定した。発酵法によるグルタミン酸生産の発明以来50年を迎えて、微生物を利用したものづくりの新展開について大学と企業の研究者が産学連携を意識し討論を行った。

本センターの葛山智久助教授は、放線菌由来の新規酵素を利用した有用プレニル化合物ライブラリー構築について、本学農学生命科学研究科の大西康夫助教授は、放線菌による耐熱性ポリマー原料の合成について発表した。（株）海洋バイオテクノロジー研究所の三沢典彦主幹研究員は、分子進化工学技術によって機能向上させた酵素による難化学合成化合物ライブラリーの構築について、メルシャン（株）の有澤章主任研究員は、微生物由来の水酸基導入酵素を利用した有用物質の探索・開発・製造について、それぞれの企業における取り組みを紹介した。本センターの西山真教授は、リジン発酵の鍵酵素アスパラギン酸キナーゼの活性調節機構を酵素の立体構造から解析した発表を行った。京都大学の阪井康能教授は、メタノール資化性酵母を用いた活性型有用タンパク質生産のための戦略とその背景にある基礎科学について講演し、北海道大学の横田篤教授は、バイオプロセスによる有用物質生産のためのエネルギー代謝の改変の重要性について、信州大学の池田正人教授は、アミノ酸発酵改善のための酸素要求性の改変について講演を行った。

2007年は国際シンポジウムとして開催される予定である。



シンポジウムの様子

12月13日（水）、国立劇場で開かれている文楽鑑賞教室に参加した。留学生旅行ではどちらかと言うと留学生相互の交流・懇親が重点になるのに対して、今回の文楽鑑賞教室は、文楽という日本のユニークな芸術に留学生も触れてもらおうと企画された。参加者は、教職員も含めて29名であった。

サッと緞帳が下りると、「八百屋お七」のクライマックスの「火の見櫓の段」という息を飲むような場面をさわりとして見た後、実際の演者による義太夫節、人形使い、三味線の解説を聞いた。文楽が物語と音楽とお芝居が融合した総合芸術であることがよく分る。それぞれ楽しく貴重なお話だったが、特に、人形に人間と見紛うばかりのしぐさや表情を与えるテクニックの実演と解説には、留学生たちも興味津々の様子であった。休憩の後、「恋女房染分手綱」の「道中双六の段」と「重の井子別れの段」—これはかなり長く70分—を見てお開きとなった。

義太夫節の内容は、字幕は出るものの、そのままでは日本人でも理解できない部分の方が多いくらいである。留学生にとってはますます理解困難だったと思われるが、理解以前に、目で見たり耳で聞いたりして感じ取れるというのも芸術の持つ一面である。「面白かった」「驚いた」という感想も聞かれた。普段、学問研究や日常生活で見知っているのとはまた違った日本文化の一面を知る機会になったのではないかと思う。



国立劇場にて

大学院理学系研究科・理学部

部局

日本人初の物理学教授・山川健次郎 元東京帝国大学総長の胸像贈呈式が 行われる

12月21日（木）11時30分より、理学部1号館の正面玄関前において、山川健次郎元東京帝国大学総長の胸像贈呈式が行われた。式は、胸像を寄贈して下さった福田宏明氏（山川元総長の曾孫）ご夫妻、服部艶子氏（山川元総長の孫）、佐藤慎一理事・副学長、岩澤康裕理学系研究科長、副研究科長および物理学専攻長など関係者出席のもと、寄贈者の福田氏および服部氏より研究科長に胸像が手渡され、理学部1号館前の植え込みに作られた台座に設置した。

山川健次郎元総長（1854～1931年）は、東京帝国大学理科大学校（現在の東京大学理学部）で日本人初の物理学教授となられた、理学系研究科にたいへんゆかりの深い方で、その縁で今回の設置場所となったものである。昨年5月に福田氏および三木教子氏（山川元総長の孫）より、山川先生ゆかりの文書や写真など24点と、先生の物理学の教科書の原稿など7点の寄贈を受けたが、今回の贈呈式はそのうち胸像を設置するにあたり行われたものである。

山川先生は1881年、日本人として初めて物理学の教授に着任され、以後、東京帝国大学総長を2度（1901年～1905年、1913年～1920年）務められた。先生はイェール大学の卒業であるが、そのホームページ¹⁾によれば、日本において最初のX線研究を行っている。在職期間に、田中館愛橘、長岡半太郎、寺田寅彦はじめ日本の物理学の基礎を作った方々を本理学部より輩出している。山川先生は会津の出身で、少年時代には白虎隊にも属していた。後に九州帝国大学、京都帝国大学の総長も務められた（詳しくは文献²⁾寄贈された文書のなかには、田中館愛橘、長岡半太郎、菊池大麓からの書簡などあり、歴史的にきわめて興味深い。1890年ころに撮影された数学、物理、天文の教授など、帝国大学理科大学の教員の集合写真も貴重な資料である。教科書原稿も当時、物理学がどのように教えられていたかを知る上で大変興味深い。いただいた資料は、物理学専攻で保存することになった。寄贈いただいた福田宏明氏、三木教子氏に深く感謝したい。

1) <http://yale.edu/opa/intl/japan/docs/history.html>

2) 星亮一：「山川健次郎伝－白虎隊士から帝大総長へ」平凡社、2003年



山川健次郎元総長の胸像と福田宏明氏（左手前）、
服部艶子氏および岩澤康裕研究科長

大学院農学生命科学研究科・農学部

部局

家畜病院を動物医療センターへ改称

大学院農学生命科学研究科附属家畜病院は、1月1日（月）をもって、同研究科附属動物医療センターに改称された。

獣医学教育は、明治7年4月の内務省農事修学場の創設以来、農学の基本としてその近代教育が開始された。市民に開かれた家畜病院は明治13年11月の開設であり、その歴史は古い。明治15年5月の駒場農学校への改称、明治19年7月における東京農林学校への改称、昭和10年7月、東京帝国大学農学部が本郷区向ヶ丘弥生町への移転等を通して、家畜病院は常に獣医学教育の中心として貢献してきた。

戦後、農学部3号館内の一室で細々と診療が行われ、昭和27年と同40年に平屋建て病院施設が建てられた。平成3年4月に現在の場所に家畜病院が建設され、その時点で、建物名称としてベテリナリーメディカルセンターを使用したが、公式には家畜病院という名称が用いられ、現在に至った。

今回名称変更した理由の一つは、「家畜」という名称が一般には牛、ブタ、羊などの畜産動物などを意味し、犬、猫などいわゆる愛玩動物の名称にはそぐわない、とするイメージがあることである。本センターには年間のべ1万5千頭以上の動物症例が来院するが、その飼い主にとって、家畜、という名称には抵抗がある。また、ここで診療を行う若手獣医師にとっても、家畜という名称に違和感を持つものも少なくない。

一方、本センターでは動物の診療に加え、様々な研究も実施されている。特に最近では医学等の分野との共同研究が活発に行われており、獣医学だけでなく、医学の発展にも寄与している。これらは、高度獣医療を実施できる本センターの施設・設備と獣医学の知識・技術をもと

に行われているものである。今後とも、このような活動は本センターの重要な活動であり、マウス、ラットより大きな動物を用いる、本学における研究センターとしての役割も果たしたいと考えている。そのため、現在、人員、施設の充実を図る努力を行っている段階にある。その際にも「家畜病院」という名称より、より広い内容を意味する「動物医療センター」が適当と考えられる。



佐々木伸雄センター長（左から2番目）と
會田勝美研究科長（右から2番目）

食べながら、各国の新年の過ごし方について話し合う場面も見られ、日本の伝統的な正月を紹介するだけではない文化的な交流が行われていた。

三鷹国際学生宿舎には、宿舎生の3割、約180名の留学生が入居しており、院生会や宿舎生会を中心に、日本人学生と留学生との交流活動が続けられている。



ずらりと揃った参加者の書初め

大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で「新年会」
開催される
部局

1月7日（日）、三鷹国際学生宿舎内共用棟ホールにおいて、院生会（留学生の生活をサポートするための大学院学生による組織）主催、宿舎生会（宿舎に居住する全学生を構成員とする組織）の協力による新年会が行われた。

この催しは、同宿舎に入居している留学生に、日本の伝統的な正月の過ごし方を紹介することを通じた、日本人学生と留学生との交流を目的としている。会場には、羽子板、独楽、歌留多などの日本の伝統的な遊びや書初め、もちつきなどのコーナーが用意され、日本人学生約20名、留学生約30人の参加者が日本の正月を満喫した。書初めコーナーは、各留学生が自分の母国語で一筆し、各国の特色が出たオリジナルの作品を互いに紹介し合うなど非常に盛況であった。

いろは歌留多は、百人一首などに比べ日本語がそれほど堪能でなくともとつきやすいため、日本人学生、留学生両方において、学生同士の白熱したバトルが繰り返された。

小型の臼と杵を使ったもちつきのコーナーでは、規模こそ小さいながらも、参加者は自分でついたつきたてのもちや雑煮を堪能していた。

また、設置されたこたつでみかんやちらし寿司などを



白熱した歌留多の様子



おっかなびっくりのもちつき体験

＝ 特集テーマ&執筆部署募集告知＝

特集の記事を執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

- ① テーマの選定
全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することにしています。まずは一度、総務部広報課に気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。
- ② 内容・構成の決定
テーマが決まったら執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。見開き2ページをひとつの単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。
- ③ 原稿の執筆
決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。原稿はwordファイルでご制作下さい。
- ④ ビジュアル要素の提供
特集に盛り込む写真・図・イラストを執筆部署から提供していただきます。手持ちの写真がない場合は編集スタッフが撮影にうかがいます。
- ⑤ デザイン
お書きいただいた原稿、ご提供いただいた写真・図等を素材にして、編集スタッフがページデザインを作ります。もちろん、執筆部署でデザインを作っていたいただいてもかまいません。
- ⑥ 校正
デザインしたページイメージをお送りしますので、主に文字校正を行なっていただきます。
- ⑦ 完成
刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。通常の学内広報の切日（第1・第3水曜日）の2日前を原稿締切日とします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

総務部広報課 広報企画チーム
TEL：03-3811-3393 内線22031
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ニュースページ、 インフォメーションページ への記事提出要領

「学内広報」は皆さんから送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

2. 締切日

原則として各月第1・3水曜日を原稿の締切日とする（配布は翌々週の火曜日）。ただし祝日等により変更となる場合があるため、HPで発行スケジュールを確認すること。

3. 提出の際の留意事項

(1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

(2) 写真

- ① 写真を掲載する場合はキャプション（説明文）を25文字以内で添えること。
- ② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、jpeg等の形式による元の画像ファイルを送付すること。
- ③ 写真は電子データがない場合、プリントのものも掲載可とする。

(3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること（ただし、大きな図表などが含まれる場合は、この限りではない）。
- ② 原稿のはじめに担当部局名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

(4) 文章表現のきまり

- ① 句読点は「、」「。」を用いること（「，」「.」は用いない）。
- ② 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ③ この他、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とする等、表記統一のための修正を編集段階で行う。

※編集スケジュールの都合上、原則として校正はできません。基本的にはいただいた原稿がそのまま掲載されますので、内容に間違いのないよう、十分ご注意ください。

4. 問い合わせ先・提出先

総務部広報課広報企画チーム
TEL：03-3811-3393 内線22031
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

クリーンキャンパス「レッド軍団」活躍中！！

「東大構内をクリーンなキャンパスにする清掃のプロフェッショナルを目指す」10名の障がいをもつ職員（以下スタッフ）と昨年の10月より仕事をしております。私は、この環境整備チームでスタッフの業務指導と生活指導を先輩職員と共にしています。

就任して間もなく、清掃場所を分担しているとき、スタッフの1人に「ここから、向こうに掃いていこう」と指示しました。「はい」と返事してくれました。それでは、次のスタッフの所へ行きつつ振り返ってみると、指示と反対方向に掃き始めていました。本人は、ふざけているのではなく、不真面目でもなく、真剣に掃除をしていました。

これは、スタッフが抽象的な言葉を理解しにくかったのであり、私の指示が不適切であると実感させられました。その後は、開始地点に本人を立て、目標となる人や物を目印に「〇〇君がいる方に掃こう」というような工夫をすようにしています。

スタッフの特性をしっかりと認識し、仕事を図る上で何が必要かを思考し、各自が仕事に対して情熱を傾けることができるアドバイスをすることがコーディネーターの役目だと思います。

施設部保全課環境整備チーム

コーディネーター 渡部 佳朗さん

スタッフには、指示だけでなく、褒めたり、叱ったり、フォローしたりしますが、逆にスタッフから私が癒しや元気をもらうこともあります。お互いに生かされながら徐々に成長していく、共存共栄の関係を保ちながら、仕事のレベルアップと充実感を高めていきたいと考えています。東大のバリアフリー化がますます促進し、障がい

を持っていても働く意欲があり、仕事をする能力がある人が活躍できる場がさらに広がりますよう、学生、教職員の御理解、御協力をお願い致します。そして、赤い防寒着に身を包んだ「レッド軍団」へのご支援を何よりもよろしくお願い致します。



「見た目以上の」支援の広がり ～対話の重要性～

教養学部文科I類2年 徳永 健太さん



「指も動かないんだっけ？」と、クラスメートが親指と人差し指をくつつけながら私に聞いてきた。私が「そうだよ。動くように見えるでしょ」と答えると、彼はすぐに私のプリントを半分に折ってくれた。

車椅子の主な困難は移動である。実際、私が大学で受ける支援の中心は移動介助だ。この移動の困難は、車椅子という見た目から推測できる。つまり、「車椅子＝足が不自由」という意識だ。したがって、不自由はスロープやエレベーターの設置により除去される。これがバリアフリーの第一歩であることは事実だが、車椅子と足の直結、要するにスロープさえ設置すれば大丈夫という考えだけでは不十分な面もあるだろう。たとえば、私のように上半身にも

障害があり車椅子をこぐ力が弱い人は、緩やかなスロープでも上れない場合がある。このとき、移動の要件は「一般的」なスロープに加えて、「個別的」な移動介助者、つまり見た目以上の支援となるのである。

個別のバリアフリーは多岐にわたるため、社会全体としての実現は難しい。そこで重要なのが対話である。対話は、障害の理解の前提であり、見た目以上の支援には不可欠である。情報の発信と共有により他者と密な関係を築いていくことは、障害者に限ったことではないし、支援側だけでなく被支援側の意見を取り込むことで、困難に対し容易かつ迅速に対処できると言えるだろう。先のプリント事例においても、私はプリントを折れないわけではないが頼むことで負担が軽減されているし、大学では頻りにバリアフリー支援室と話し合いを行っている。意思伝達・対話による支援の幅の広がり、迷惑意識やできないことの強調を伴う点で障害者も支援者も躊躇しがちである。しかし、迷惑の判断も「できる」・「できない」の境界も対話で共有できるのだから、対話によってこそ、物理的なバリアフリーに加えて意識的なバリアフリーも実現するだろう。バリアフリー社会は、人々のちょっとした意識改革の積み重ねで構築されるのである。

<東京大学バリアフリー支援室 連絡先> E-mail: spds-staff@mm.itc.u-tokyo.ac.jp

本郷支所(理学部旧1号館135号室): TEL:03-5841-1715 FAX:03-5841-1717

駒場支所(先端科学技術研究センター3号館503号室): TEL:03-5452-5067 FAX:03-5452-5068



IR3Sの大学院教育

味 埜 俊
サステナビリティ学連携
研究機構 兼任教授
新領域創成科学研究科 教授

IR3Sは大学による連携「研究」機構ですが、大学である以上、「教育」もその重要な使命です。「さすてなTimes」にはこれまでIR3Sについてのいろいろな話題が出ましたが、今回はIR3Sがサステナビリティに関しての教育をどう考え、何をやるかとしているかというお話をさせていただきます。

まず東大では、学融合を合い言葉に柏キャンパスで教育研究を展開している大学院新領域創成科学研究科・環境学研究系と連携して、サステナビリティ学に関する新しい修士プログラムを平成19年度に立ち上げようと準備中です。このプログラムは日本人も留学生もともに受け入れ、すべて英語で講義するというユニークなものです。サステナブルな社会の構築を目指すために必要な基礎知識や概念を習得するだけでなく、国際感覚やさまざまなスキルを経験として身につけるためにケーススタディや演習を重視した独自のカリキュラムを提供することになっています。異なる専門分野で学部教育を終えた世界各国の学生が柏キャンパスに集い、講義や相互討論や共同で行う演習を通じてサステナブルな社会の構築という人類共通の目標のために切磋琢磨する、そんなイメージを考えています。

これに対し、IR3Sの他の連携大学でもそれぞれ独自の教育を準備中です。たとえば、京大は環境マネジメント専攻の中に新しいサステナビリティコースを作ろうとしており、阪大は特定のコースは作りませんが、テクノロジーとサステナビリティの関連を重視して全学に開いたサステナビリティに関する講義を提供しようとしています。北大は「ガバナンス」をキーワードに、たくさんの方の研究科がそれぞれ自分の分野でサステナビリティに関わる講義群を提供し合い、それらを統合する形の新しいプログラムを構想中です。茨城大学は環境変化（とくに温暖化）に適応するための科学をテーマに掲げ、新しい大学院カリキュラムを準備中です。

そして、これらの大学がIR3Sのもとに連携し、遠隔講義による単位互換システムを構築し、お互いの魅力を補完し合えるようにすることが当面の目標です。東大でこのプログラムに入学した学生が、京大の環境経済学と阪大のテクノロジー論と北大の地域ガバナンス論と茨城大の気候変動適応学を履修し、東大のサステナビリティ学演習でシステム思考や合意形成のスキルを身につけて、「修士（サステナビリティ学）」の学位を得るといったことができるようにしたいと思っています。

さらに、2つの大学（たとえば東大と京大）の両方の名前で共同で出す学位（共同学位 - Dual Degree）を作るのが将来の目標です。このような仕組みは、世界中の大学がサステナビリティに関する独自の取り組みを進める中で、日本の大学が世界にアピールするために是非必要なことだと考えています。

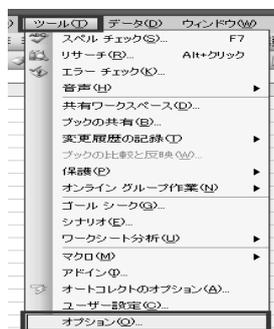


パスワードの設定

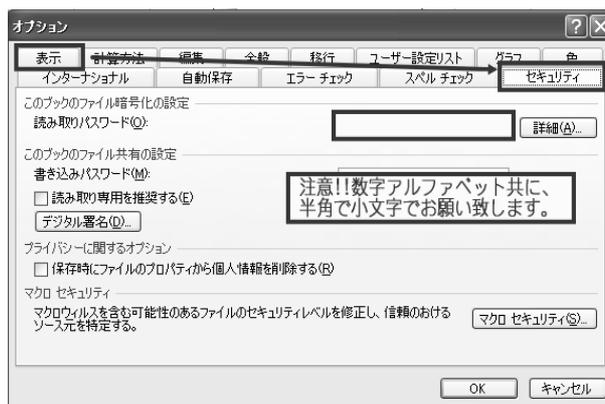
個人情報保護法が施行されてから1年半が過ぎました。オンラインショッピングなどしているとパスワードや暗号化はもうあたりまえのことですが、仕事の中でも「パスワードをかけて送ってください。」といわれることが増えてきていませんか？

今回はエクセルやワードのパスワード設定方法のご紹介です。ちなみに、共有フォルダ等にファイルを入れて、パスワードを知っている特定のメンバーにだけ見られるようにする、という使い方もできます。

- ① メニューの [ツール] から [オプション] をクリックします。



- ② [オプション] を開いたら、[セキュリティ] タブに切り替えます。
※初期画面は [表示] タブ



- ③ 読み取りパスワードに、パスワードを設定します。(数字・アルファベット共に半角・小文字)

OKを押して設定完了です。
最後に、確認のためパスワードを聞いて来るので、設定したパスワードを、もう一度入力して下さい。

PC講習会 火～金 13:30～16:30 開催中です!
問合せ: 総務部情報課運用管理チーム (内)22179



発明届のオンライン提出について

オンライン特許管理システムについて

かねてより計画しておりました特許システムについて、H17年1月より工学系研究科に導入・試行運用してきましたが、H19年1月15日より本特許システムの全学への展開を行っています。

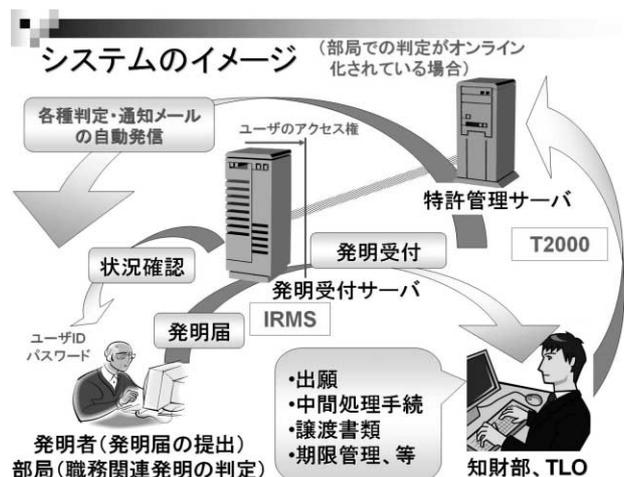
このシステムの導入により、発明者が自分のパソコンを用いて、オンライン（ウェブ画面上）で発明届を提出することが可能となり、また各種通知メールが自動発信されるようになります。

これにより発明取扱に関する諸手続きの一層の迅速化を図るものです。

（システム構成）

発明者がオンライン（発明者のパソコンのウェブ画面）で発明届の提出を行うことができるシステムで、下記のIRMSとT2000より構成されます。

- ・ 発明等届出管理システム (IRMS: Invention Report Management System) (発明者、部局用)
 - ⇒ 発明届の提出から、承継の判定、各種通知文書の自動発信までオンライン化
- ・ 特許管理システム(T2000) (知的財産部管理用)
 - ⇒ 産学連携本部 (知的財産部) において一元管理



現在試行運用中の工学系研究科にあつては、部局知的財産室が直接オンラインにより発明届出を受付け、職務関連発明の判定通知、知的財産部への届出送付についてもこのたびの運用によりオンライン化されます。同様のオンライン化については、工学系研究科以外の部局においても各部局のネットワーク状況を確認のうえ、これまで発明等の届出件数の多かった生産技術研究所、大学院新領域創成科学研究科、大学院情報理工学系研究科、医科学研究所から順次導入の予定です。

オンラインで発明届を提出するには

発明等届出管理システムを利用するには、専用のID・パスワードが必要です。

IDの申請は、下記のシステム利用申請書へご記入の上、以下の宛先へお送り下さい。

※なおIDと仮パスワードの発行には、数日かかる場合があります。

利用申請書：氏名・職名・所属部局・専攻・連絡先(電話/メールアドレス)が、記入項目です。

http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/chiteki/patent-online/200612patent-online_id.xls

送り先：産学連携本部知的財産部宛て

（事務担当：研究協力部 産学連携課 知的財産マネジメントチーム）

sangaku2@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

詳細については、産学連携本部の下記ホームページに以下の内容につき掲載していますので、ご参照下さい。

発明等届出管理システムのURLが記載されています。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/chiteki/online.html>

- ・ 当システムの主な機能とシステムのイメージ
- ・ 部局の方々用の運用マニュアル
- ・ 発明者の方々ための操作マニュアル（ご利用になる前に必ずお読み下さい）。

ID、パスワードは、ログインする本人が使用するためのものであり、発明届は代表届出者がログインして作成・提出願います。初回ログイン時に、操作マニュアルに従って任意のパスワードに変更するとともに、秘密情報として厳重に管理するようお願いいたします。

本システムへのアクセスは、大学内からのみ可能です。
また、システムの動作環境としては、以下を推奨します。
OS = Windows 2000 SP4以降、WindowsXP SP2以降
対応ブラウザ = Internet Explorer 6.0 SP2
注：Windows Vista, Internet Explorer 7は現在動作確認していません。

お知らせ

◇常時発表者募集・随時開催

「UCRシーズ実用化提案会」「UCRプロジェクト提案会」

産業界との共同研究のパートナーを探索されたい方や、研究会立ち上げをご希望の研究者は、下記連絡先にご連絡ください。

連絡先：産学連携本部（研究協力部 産学連携課）

電話：内線22857（外線03-5841-2857）

ホームページ：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

※「東京大学トップページ」上で「産学連携本部」をクリック

バスケットボール部男子

私たちバスケットボール部男子は、選手24人・マネージャー4人の仲間と共に、日々9月のリーグ戦に向けて活動しています。わが部は関東大学リーグの3部の上位に位置しています。関東大学リーグ120校以上の中で、3部の上位というのはその中で20位程度にあたります。



3部以上のチームは全国の名だたる高校からのスポーツ推薦による選手で固められています。本学は推薦のない大学の中で無類の強さを誇っており、推薦のない大学が推薦で集められた強豪の大学に立ち向かい、打ち破っていくことは我がバスケ部の大きな魅力であると言えます。

しかしそのようなレベルの高いリーグで勝つというのは簡単ではありません。ですが伝統ある本学バスケ部にはバスケが上手くなるための方法論が確立されています。身長

などの体格差も、頭をフルに使い、どんなプレーをすればよいのか、そのためにはどんな練習をすればよいのか、と考えることによって補っています。

昨年度は最大の目標であった3部Bリーグ優勝、3部Aリーグ昇格を達成しました。現在もその勢いそのままに、さらなる好成績を目指して練習を続けています。冬場はファンダメンタルの向上を目標に練習し、シーズン中は各大会に向けてより実践的な練習を行っています。



今後もチーム一丸となって真剣にそして楽しくバスケットに取り組んでいきますので、興味のある人はバスケが大好きだという気持ちを持って駒場第二体育館に来てください。

(バスケットボール部男子
野中 壮平)

★★DATA★★

創立：1925（大正14）年
部員数：選手24人、スタッフ4人
練習場所：駒場第二体育館
練習日：火・木18:30～21:00 土・日14:00～17:00
年間予定：5月 京王電鉄杯、関東トーナメント
6月 新人戦
7月 七大戦
9、10月 リーグ戦
11月 六大学戦
活動実績：2006年3部Aリーグ昇格
部長：川原 信隆（医学系研究科助教授）
監督：稲垣 一郎（三井物産）
HP：<http://www.u-tokyo-basketball.com/>

総務部

総務部は、主に運動会所属部から派遣された人によって構成されており、「総務」の文字通り、運動会に関する事務を幅広く行っております。その具体例の幾つかを紹介いたします。

まず運動会所属部に対しての予算配分や成績優秀な部の表彰、さらに運動会加入希望団体の審査等を行っています。

また、運動会報やホームページ等を通じての運動会所属部の紹介も積極的に行っております。先日行われた駒場祭では、ラクロス部とアメリカンフットボール部の特集を組んだ運動会機関紙『東大スポーツ』を配布しました。

さらに、運動会員に様々な運動を楽しんでもらうため、多くの講習会・大会を企画・実施しております。例年行っているものに加えて、今年度は新たに合気道講習会や空手講習会を実施し、好評を博しました。

スポーティアの運営も総務部の大切な仕事です。スポーティアとは、乗鞍、下賀茂、戸田、山中の4カ所にある東京大学の保健体育施設のことですが、総務部は夏期にこれらの寮に部員を派遣し、そのほかの運動部から派遣されたスタッフとともに寮の運営を行っています。

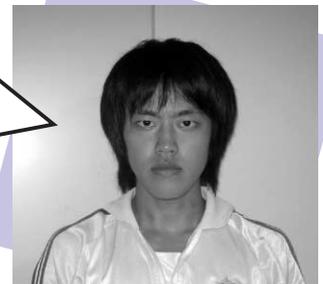
総務部は仕事も多様かつ多量で、大変であることは事実です。しかしそれだけに、他では得られない貴重な経験、多くの友人、さらには仕事をやり遂げることへの責任感を得ることができる、やりがいのある部でもあるのです。

(総務部 利穂 祐起)

★★DATA★★

部員数：35人
活動場所：御殿下記念館モール階
活動予定：七大戦
伊豆・戸田マラソン
水上運動会
総長杯サッカー大会・野球大会
他各種講習会・大会の運営
夏期開寮中のスポーティア運営 など
HP：<http://www.undou-kai.com/>

運動部紹介は
これにて
ひとまず
完結です。
ご愛読
ありがとう
ございました！



総務部委員長 石田 慎
(ハンドボール部3年)

編集：学生部学生課体育チーム (内) 22510

ワタシのオシゴト / 第7回

Rings around the UT

人事部分分析グループ人事業務改善チーム

寺床 純三 さん



第77回

～広報センターより～



広報センター 建物由来記

広報センターは、東京都選定歴史的建造物*です。他に農学部3号館と七徳堂(シテ外ウ/武道場)があります。3つ共に、平成16(2004)年3月30日に選定されました。

「前身は何だったのか?」とよく聞かれるので、今回は、広報センターのことについて、お話ししようと思います。

大正15(1926)年1月、龍岡門横に東京帝国大学附属医院の『外来患者夜間診療所』として建てられました。のちに夜間だけではなく昼間の受付も行われるようになり、名称は『急病者受付所(ウケツケドコロ)』に変わっています。

(この時の表札看板は、建物正面に取り付けられて残っていますが、現在は広報センターの看板で覆われています)急病傷者の受付業務は、昭和20(1945)年5月まで続きました。その後、昭和23(1948)年8月から平成6(1994)年9月まで『東京大学医師会』の事務局として使用されていたようです。そして、翌年の9月21日に、大学の情報発信施設『広報センター』がオープンしました。国立大学では名古屋大学に続き、2番目の広報施設の開設となりました。

ところで、前述の3つの建物がテレビ番組で紹介されたことがあり、その際に取材を受けました。「古い建物で働いている感想を話してください」と求められて、ちょっと困りました。私にとっては、たまたま職場がココだったというだけでしたし、仕事をするに夢中で、特に意識したことはありませんでしたから。でも最近、建物にとっても、人との調和がとても大切ではないかと思うようになりました。ご利用者が増えるにつれて活気を帯び、多くの人たちの温もりを受けて生き生きとしてきたように感じのです。さらに、平成16(2004)年7月からスタートした、東大生によるキャンパスツアーのコースの中にも組み込まれて、ますます活動的になってきました。「ここで過ごしたあとのツアーの後半は、参加者とのコミュニケーションがスムーズにいきます」とガイドの学生さんが話してくれたことがあります。歴史を積み重ねてきたこの建物には、皆さんを和やかにしてくれる力もあるのかもしれない。

竣工から満81年。使われる目的は変わりましたが、活躍の場を与えられ、いまだ現役というのは建物冥利に尽きるでしょうね。外観の洒落たデザインが好きというファンの声も聞かれます。なかで働く私たちは、この建物との付き合いを大事にしていこうと思います。

～次回へ続くかもしれない!?～



← 龍岡門横の広報センター

*東京都選定歴史的建造物
歴史的建造物のうち
景観上重要なもの
(文化財を除く)



バランスをとりながら…

人事部分分析グループ人事業務改善チームの寺床です。

現在、私は職員のみなさんの人事情報や給与情報を管理している、人事給与システムの設定や課題検討をしています。このシステムは2006年4月より稼働し、これまで職員みなさんの職種や俸給に合わせた給与・賞与が支払われるようシステムの設定



をしてきました。今後はこのシステムを利用し、職員それぞれのパソコンからWEB上で給与明細が見られたり各種申請手続きが行われるよう、事務業務改善に取り組んでいきます。

このように一日パソコンと向き合う仕事ですが、頭脳労働より肉体労働向きの私は、昼休みにグラウンドへ出て他部局の職員のみなさんとサッカーをし、頭脳プレーよりパワープレーで一日の頭と体のバランスを維持しています。この時間は貴重なコミュニケーションの時間でもあり、仕事では関わりのない職員の方達と知り合えるので、多くの人と話すようにしています。

同様に、仕事でもコミュニケーションを大切に、システムを利用される方の意見を聞いて、使いやすいものにしていきたいと思っています。



血液型: B型
自分の性格: ガテン系
出身地: 埼玉県

次回執筆者のご指名: 吉富勇一郎さん
関係: 昼休みサッカーで削りあって、お互いを高めています。

一言紹介: 見た目は怖いのですが(坊主なので)、話してみるととっても気さく! 仲のいい先輩です。



第22回 調達改善とその効果の帰属

■総合研究博物館関連グッズご好評！！

昨年から総合研究博物館で開催中の「東京大学コレクションー写真家上田義彦のマニエリスム博物誌」は、ご好評につき2月5日(月)～4月27日(金)まで会期が延長されました。コミュニケーションセンター(以下、UTCC)では、この展示の関連グッズを販売しており、中でもポストカードは大変人気があります。この他にも学内の建物を中心としたオリジナルポストカードを販売しているのですが、1月29日現在までにオリジナルポストカード541枚、博物館展示ポストカード499枚を販売し、スタッフ一同驚いています。

展示をご覧頂いた方々から、「感動したよ!」「素敵でした!」など数多くの喜びの言葉を頂きました。これも、総合研究博物館関係スタッフのみなさまの、日々の努力の賜物と感じております。そんな記念になる商品をご提供できることを、大変嬉しく思っております。



■ポストカード

●販売価格：150円(税込)全12種

■UTCCスタッフ紹介 ～Part 2～

UTCCでは東大の学生が活躍しています。今後も少しずつ紹介できればと思っておりますのでよろしくをお願いします。

励みになりますので、店頭で見かけた際はお声がけ下さい。



工学部機械情報工学科
山下研究室 4年
岩井 孝介

UTCCでは学生スタッフを1年程やらせて頂いております。主な仕事の内容は販売ですが、展示の企画等もやらせて頂いております。例えば昨年には、私の所属する学科で研究されている世界でも先端の腱駆動ロボット「腱次」の展示を企画いたしました。

辻店長、吉岡副店長をはじめ様々な学部・学科の学生スタッフの方々と毎日楽しく仕事させていただいています。今年も興味深い企画を行って行きたいと思いますので今後ともUTCCをよろしくをお願いします。

(担当：コミュニケーションセンター 辻)

今回はやや「堅苦しい」話、調達改善効果の帰属に関するものです。企業の場合は、利益確保が組織の目標ともいえますから、調達改善効果という達成目標とその配分は(完全ではないにせよ)別問題といえます。しかし、大学の場合は、部局自治の伝統のせいか、配分ルールに納得が得られない限り調達改善自体が進まないほど両者は強く結びついてしまいます。

本学の調達改善の推進に当たっては、調達改善を全学的に進めていく、つまり本部と部局が協力して取り組みましょうという趣旨で、調達改善効果も「本部・部局折半」を原則とすることにしました。さて、この原則は簡略明快なものなのですが、どうやってそれを実現するかは、またもうひとつ別の問題でした。

調達改善の重点分野とそれぞれの対策の基本的内容が定まった段階で、調達本部では「調達改善効果の学内配分方法について」という提案を科所長会議に提出し、18年度については契約の担当区分に従って、調達改善効果を本部と部局に帰属させるということでの承を得ました。18年度の調達改善計画によれば、この配分方式によって、本部・部局の帰属効果がほぼ折半に近いものとなると考えられたからです。

この配分方法には、重点分野である印刷及び修繕について、大型件名の契約を本部に集約するという事柄が含まれていました。つまり、印刷については1件100万円以上の案件、修繕については1件200万円以上の案件は本部契約とし、従ってその効果は本部帰属ということだったわけです。

しかし、この大型案件がなかなか本部に来ません。調達本部では、過去の実績調べから大型案件の存在、そして件数のある程度予測したうえで待ち構えていたのですが、さっぱり来ません。突然事情が変わって今年は大型案件がない、とも想像できません。

どうやら、本部に契約を委ねると効果も全部本部に帰属してしまうことが、ネックになった可能性があるとも思われてまいりました。そこで、修繕については200万円以上の大型件名については、部局に総額の3分の1のみを負担させる一種のマッチング方式を、印刷については、本部契約とする大型件名についてもその効果は全額元の部局に帰属させることとしました。

この措置は、調達改善効果を本部に確保することより、調達改善そのものの進捗を優先したものです。また、前々回の調達改善効果の算定同様に、調達改善効果の配分に関してもあまり手間ひま(すなわちコスト)をかけるべきではないという考え方でもあります。まずは全学で調達改善効果を挙げるこそが大事です。



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

調達本部連絡先 ☎22148 櫻井

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

大学院教育学研究科・教育学部、大学院人文社会系研究科・文学部、大学院情報学環・学際情報学府

公開シンポジウム開催のお知らせ

[東京大学創立130周年記念行事] 公開シンポジウム
「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館
一連携に果たす大学の役割」

資料の収集、保存、組織化、展示・提供という共通の要素をもつ図書館、博物館・美術館、文書館。知の組織化の手法から制度的問題までを議論します。

[プログラム]

日時：2月17日（土）13：00～17：00

会場：弥生キャンパス弥生講堂（一条ホール）

司会：

吉見 俊哉（情報学環）

発表：

早乙女 雅博（人文社会系研究科）

「高句麗古墳壁画の模写資料」

馬場 章（情報学環）

「文化資源統合デジタルアーカイブの試み」

石川 徹也（史料編纂所）

「学術活動成果の集積としての知識データベース」

コメント：

木下 直之（人文社会系研究科）

博物館学の立場から

佐藤 健二（人文社会系研究科）

文化資源学の立場から

根本 彰（教育学研究科）
図書館情報学の立場から

詳細については、下記ホームページを参照。
<http://panflute.p.u-tokyo.ac.jp/>

申し込み方法：

参加希望の方は、事前に電話か電子メールで、「氏名」・「所属機関」を下記の申し込み先までご連絡ください。

申し込み・問い合わせ先：

大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース事務局
TEL：03-5841-3976
E-mail：shogai@p.u-tokyo.ac.jp

シンポジウム・講演会

医科学研究所

平成18年度公開班会議のお知らせ

文部科学省 科学研究費補助金 特定領域研究
平成18年度公開班会議
「幹細胞の可塑性と未分化性維持機構」

開催日時：2月19日（月）13：00～18：00
20日（火）9：00～17：40

場所：医科学研究所 1号館講堂

プログラム：

SESSION 1 幹細胞の未分化性維持機構

SESSION 2 細胞の初期化の機構

SESSION 3 幹細胞の多様性と可塑性

Cutting Edge Lecture 1

精子幹細胞の機能とその技術開発

篠原 美都

（京都大学・大学院医学研究科・先端領域融合医学研究機構）

Cutting Edge Lecture 2

体細胞融合ES細胞核からの染色体除去

多田 高

（京都大学・再生医科学研究所・幹細胞加工研究領域）

*本会議はどなたでも御参加いただけます。入場無料。

本領域では、造血幹細胞やES細胞を中心に蓄積されてきた幹細胞に関する知見を基盤にして、幹細胞の未分化性の維持機構、組織幹細胞の多様性と可塑性、さらに

は細胞の初期化機構を解明することにより、組織幹細胞の分化・自己複製の制御や各移植をせずに体細胞を初期化する技術を確認し、自己の組織・臓器を用いた再生医学の実現に向けて、幹細胞生物学という新しい学際的な研究領域を確立することを目標としています。

多数の方々のご来聴をお待ちしております。研究室の若手研究者、大学院生の方々もお誘い合わせの上、ご来場いただけますようお願いいたします。

幹細胞研究の貴重な情報交換の場となるものと確信しております。

問い合わせ先：

領域代表者：中内啓光

事務担当：斎藤、石塚

東京大学医科学研究所ヒト疾患モデル研究センター

幹細胞治療（高次機能）研究分野

〒108-8639 東京都港区白金台4-6-1

TEL：03-5449-5331/FAX：03-5449-5451

E-mail：saito-m@ims.u-tokyo.ac.jp

URL：http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/sct/stemcell

お知らせ

お知らせ

退職教員の最終講義

校内広報では、1月から3月の間に発行される各号において、今年度末をもって本学を退職される方々の最終講義のお知らせを掲載します。

大学院工学系研究科・工学部

鎌田 元康 教授

(建築学専攻 建築環境学講座)

日時：2月28日(水)15:00~17:00

会場：工学部1号館15号教室

演題：「空気・水環境と建築設備」

長澤 泰 教授

(建築学専攻)

日時：3月9日(金)15:00~17:00

会場：工学部1号館15号教室

演題：「新しい建築計画への試み：地理的環境としての建築」

藤原 毅夫 教授

(物理工学専攻・工業力学講座)

日時：2月28日(水)16:00~17:00

会場：工学部6号館2階63号講義室

演題：「固体電子構造理論について」

大学院理学系研究科・理学部

和達 三樹 教授

(物理学専攻)

日時：2月9日(金)16:30~18:00

会場：理学部1号館 小柴ホール

演題：「私の物性基礎論・統計力学
—研究者として、教育者として—」

大学院新領域創成科学研究科

大森 博雄 教授

(自然環境学専攻・自然環境構造学分野)

日時：3月16日(金)15:00~17:00

会場：柏キャンパス・

新領域創成科学研究科環境棟1階・F Sホール

演題：「自然環境学の課題と展望」

国際・産学共同研究センター

安田 浩 教授

(前国際・産学共同研究センター長)

日時：2月20日(火)15:30~17:20(受付開始15:00)

会場：工学部新2号館大講堂(213講義室)

演題：「画像によるイノベーションを目指す半世紀」

連絡先：last.lec@mpeg.rcast.u-tokyo.ac.jp

海洋研究所

石井 輝秋 助教授

(海洋底科学部門・海洋底テクトニクス分野)

日時：3月15日(木)13:00~14:00

会場：海洋研究所講堂

演題：「海洋底の岩石」

寺崎 誠 教授

(国際沿岸海洋研究センター・沿岸生態分野)

日時：3月15日(木)14:00~15:00

会場：海洋研究所講堂

演題：「私のプランクトン研究」

太田 秀 教授

(海洋生態系動態部門・底生生物分野)

日時：3月15日(木)15:30~16:30

会場：海洋研究所講堂

演題：「奈落曼荼羅紀行」

小池 勲夫 教授

(海洋化学部門・生元素動態分野)

日時：3月15日(木)16:30~17:30

会場：海洋研究所講堂
演題：「海洋における生元素循環と生物活動」

（海洋研究所では3月15日（木）に4名が海洋研究所講堂にて最終講義を行います。）

お知らせ

大学院情報学環・学際情報学府

印刷博物館・東京大学大学院情報学環共催 企画展示のお知らせ

印刷博物館・東京大学大学院情報学環共催
企画展示 モード・オブ・ザ・ウォー
東京大学大学院情報学環所蔵 第一次世界大戦期
プロパガンダ・ポスター コレクションより

◆企画展内容

20世紀がアメリカの世紀であり、メディアの世紀であり、そして何よりも戦争の世紀であったとするならば、その出発点をなしたのは第一次世界大戦です。この戦争において、アメリカのメディアはいかに戦争にかかわり、どのように国民の意識を動員していったのでしょうか。

20世紀初頭、大衆に最も影響力あるメディアは、実はポスターでした。自分たちのアイデンティティや義務、連帯を強調、喚起させるようなさまざまなイメージが描かれています。また、この頃、印刷技術は絶頂期を迎えており、19世紀の石版画の伝統と20世紀の工業印刷技術が多様な融合をみることもできます。

この展覧会では、東京大学大学院情報学環が所蔵する「第一次世界大戦期プロパガンダ・ポスター コレクション」の中から、アメリカで制作されたポスター約100点を展示。現代の日本においては広く紹介されることなかったこの時代のポスターを、「社会」「イメージ」「技術」の3つの視点でご紹介し、戦争と人びととの間に存在したポスター・メディアの役割について考えます。

◆展覧会内容

第1部 第一次世界大戦とアメリカ

「戦争の世紀のはじまり 第一次世界大戦」
「戦争へ向かうアメリカ」
「動員される人びと」

第2部 描かれた戦争

「イメージのなかの戦争」
「アーティストのしごと」

第3部 東京大学情報学環所蔵の第一次世界大戦期 プロパガンダ・ポスターにみる印刷技術

「情報学環所蔵の第一次世界大戦期プロパガンダ・ポ

スターの版式調査結果概要」
「第一次世界大戦期の平版印刷表現」

◆会期：1月20日（土）～3月25日（日）

休館日：毎週月曜日
（但し2月12日開館、2月13日休館）
開館時間：10：00～18：00（入場は17：30まで）

◆場所：印刷博物館

JRおよび地下鉄「飯田橋」より徒歩約13分
地下鉄有楽町線「江戸川橋」より徒歩約8分
「トッパン小石川ビル」内

◆入場料：一般800円、学生500円、中高生200円、 小学生以下無料

※20名以上の団体は各50円引き

※65歳以上の方は無料

※身体障害者手帳等お持ちの方とその付き添いの方は
無料

お問い合わせ先：印刷博物館

TEL：03-5840-2300（代表）

印刷博物館ホームページ：

<http://www.printing-museum.org/>

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施します。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
(定員12名 予約不要です。直接ご来場ください)

●コース概要：

<テーマ別ガイダンス>

1つのテーマに沿って、検索実習を交えながら解説します。

■ 自宅から検索するには？ (60分)

学内・学外を問わず利用できる無料公開のデータベース・電子ジャーナルなどを紹介します。また、通常は学内からのみ利用可能なデータベース・電子ジャーナルでも、手続きをして学外から利用できるものがありますので、その方法を紹介いたします。

さらに、帰省先や海外で図書館を利用したい人向けに、他大学等の図書館を利用する際の手続き・注意点を説明します。春休み前におすすめのコースです。

■ 図書館の蔵書を検索するには？ (60分)

学内および学外の図書館も含めて、図書館の膨大な蔵書を活用するために、ネットでできる蔵書検索をマスターしましょう。

“東京大学OPAC”（蔵書目録データベース）の使い方を中心に、図書館の蔵書を検索できるいろいろなデータベースを紹介いたします。

■ 日本の論文を探すには？ (60分)

FELIX、CiNiiの使い方を中心に、日本の論文・雑誌記事を検索できるデータベースを紹介いたします。

(※このコースは従来の「データベースユーザトレーニング・FELIXとCiNiiコース」を発展・改編したものです。)

■ 電子ジャーナルを利用するには？ (60分)

電子ジャーナルを利用すると、読みたい論文をネットですばやく入手できます。

電子ジャーナルにアクセスする方法や、代表的な出版社の電子ジャーナルサイトを例にとって、実際の利用方法を解説します。

<データベースユーザトレーニング>

特定のデータベースの使い方について、検索実習を交えながら解説します。

■ Web of Science (60分)

全分野の主要な学術雑誌（約8,800誌）に掲載された論文のデータベースです。通常のキーワードによる検索に加え、引用文献をキーにした検索も可能です。

●スケジュール：

月	火	水	木	金
			3/1	3/2 13:30-14:30 自宅から検索するには？
3/5	3/6	3/7	3/8 11:00-12:00 図書館の蔵書を検索するには？	3/9
3/12 11:00-12:00 日本の論文を探すには？	3/13	3/14 15:00-16:00 電子ジャーナルを利用するには？	3/15	3/16
3/19	3/20 15:00-16:00 Web of Science	3/21	3/22	3/23

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

TEL:03-5841-2649 (内線:22649)

E-mail: literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

URL:

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

EVENT LIST

行事名	日時	場所	連絡先・HP等
分子病理学・免疫学 合同セミナー 「がん治療における新規標的分子；ケモカインレセプター-CCR4」	2月8日(木) 16:30～	医学部・臨床講堂 (附属病院内食堂「カワナ」上)	大学院医学系研究科免疫学講座 TEL: 03-5841-3373/FAX: 03-5841-3450 http://www.immunol.m.u-tokyo.ac.jp/seminar
東文研セミナー 「米・砂糖・コーヒーから見た現代アジア経済史」	2月13日(火)14:00～ (一般公開は15:00～)	赤門総合研究棟 地下1階第2演習室	東洋文化研究所 加納啓良 TEL: 03-5841-5863/E-mail: hkano@ioc.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/cgi-bin/schedve.pl?ThuJan1818:09:002007
【東京大学創立130周年記念行事】公開シンポジウム 「知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館 一連携に果たす大学の役割」 ※18ページ参照	2月17日(土) 13:00～	弥生キャンパス弥生講堂 (一条ホール)	大学院教育学研究科・生涯学習基盤経営コース事務局 TEL: 03-5841-3976 E-mail: shogai@p.u-tokyo.ac.jp
超新星1987A 20周年記念講演会 「ニュートリノ天文学の誕生とこれから」	2月17日(土) 14:00～ (13:30開場)	安田講堂	E-mail: sn20yrs@icrr.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.icrr.u-tokyo.ac.jp/sn20yrs/
文部科学省 科学研究費補助金 特定領域研究 平成19年度公開班会議 「幹細胞の可塑性と未分化性維持機構」 ※18～19ページ参照	2月19日(月) 13:00～ 20日(火) 9:00～	医科学研究所 1号館講堂	TEL: 03-5449-5331/FAX: 03-5449-5451 E-mail: saito-m@ims.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/sct/stemcell/
シンポジウム「強磁場MRIー生命の可視化ー」	2月20日(火) 9:15～	医学部教育研究棟14階鉄門講堂	大学院新領域創成科学研究科物質系専攻和田研究室 E-mail: m-hatano@ams.k.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.k.u-tokyo.ac.jp/news/MRIsympo.pdf
第37回ビジネスローセンター公開講座 演題:未定 講師:小川洋(内閣官房知的財産戦略推進事務局長)	3月1日(木) 13:30～	法学政治学系総合教育棟 (通称:法科大学院ガラス棟)	東京大学ビジネスローセンター TEL: 03-5805-7298 FAX: 03-5805-7143 URL: http://www.j.u-tokyo.ac.jp/%7ebcl/
熱・流体・エネルギーシステム高度計算科学 国際シンポジウム	3月1日(木) 2日(金)	浅野キャンパス 武田先端知ビル 武田ホール	東京大学21 COE機械システム・イノベーション事務局 TEL/FAX: 03-5841-7437
東京大学臨床展開研究シンポジウム 「ベンチからベッドサイドへ・そして社会へ」	3月2日(金) 14:00～	安田講堂	附属病院総務課総務企画チーム 庶務担当 TEL: 03-5800-8605 FAX: 03-5800-8725 E-mail: byoinsyomu@adm.h.u-tokyo.ac.jp
ワークショップ「東アジア銭貨流通の再検討」	3月2日(金) 3日(土)	2日 山上会館002号室(地階) 3日 工学部8号館736号室(7階)	東洋文化研究所 黒田明伸 E-mail: kuroda at ioc.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/cgi-bin/schedve.pl?MonJan1513:16:062007
行事名	開催期間	場所	連絡先・HP等
印刷博物館・東京大学大学院情報学環 共催 企画展示 モード・オブ・ザ・ウォー 東京大学大学院情報学環所蔵 第一次世界大戦期 プロバガンダ・ポスター コレクションより ※20ページ参照	1月20日(土) ～3月25日(日) 休館日:毎週月曜日 (但し2月12日開館、 2月13日休館) 開館時間: 10:00～18:00 (入場は17:30まで)	印刷博物館	印刷博物館 TEL: 03-5840-2300 (代表) 印刷博物館ホームページ: http://www.printing-museum.org/



ご意見・ご感想投稿大募集!

UTカフェは読者コメントを掲載するコーナーです。「学内広報」に掲載された記事に関するご意見・ご感想をはじめ、学内の様々な事柄に関して常々思っていることなどを、気軽にお寄せください。

投稿はEメールで受け付けます。メールの本文に以下の項目を記入し、下記アドレスまでお送りください。メールの件名は「意見」としてください。誌面への掲載はペンネーム・匿名が可能ですが、連絡用として投稿の際には氏名・所属をご記入ください。

<投稿先メールアドレス>

kouhou-ex@adm.u-tokyo.ac.jp

<記入項目>

- ①氏名・所属
- ②連絡先電話番号
- ③本名・匿名・ペンネームの希望
- ④タイトル (20字以内)
- ⑤本文 (300字以内)

「東大川柳」も同時募集

「UTカフェ」では、東京大学をテーマにした「東大川柳」も同時募集します。優秀作は不定期で「UTカフェ」に掲載します。川柳の投稿の際には、メールの件名を「川柳」とし、④に川柳をご記入ください(⑤はなし)。

Contents

特集

- 02 創立130周年記念事業
シンボルマーク&キャラクター応募作品紹介

NEWS

部局ニュース

- 06 大学院教育学研究科・教育学部
留学生見学旅行報告
- 06 大学院教育学研究科・教育学部
学校高度化専攻のための教員と大学院生との打ち合わせ、附属学校で実施
- 07 大学院理学系研究科・理学部
第10回理学部公開講演会「時間の科学」
開催される
- 08 生物生産工学研究センター
シンポジウム「微生物力を活用したものづくりに向けて」開催される
- 08 大学院教育学研究科・教育学部
文楽鑑賞教室報告
- 09 大学院理学系研究科・理学部
日本人初の物理学教授・山川健次郎元東京帝国大学総長の胸像贈呈式が行われる
- 09 大学院農学生命科学研究科・農学部
家畜病院を動物医療センターへ改称
- 10 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で「新年会」開催される

コラム

- 12 バリアフリーの現場から 第4回
- 13 さすてなTimes Vol.9
- 13 PCサブリ Vol.2
- 14 Crossroad～産学連携本部だより～Vol.10
- 15 Flags運動部紹介 No.28
- 16 龍岡門横丁断 第11回
- 16 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第7回
- 17 コミュニケーションセンターだより No.29
- 17 調達本部です 第22回

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 18 大学院教育学研究科・教育学部
大学院人文社会系研究科・文学部
大学院情報学環・学際情報学府
公開シンポジウム開催のお知らせ
- 18 医科学研究所
平成18年度公開班会議のお知らせ

お知らせ

- 19 退職教員の最終講義
- 20 大学院情報学環・学際情報学府
印刷博物館・東京大学大学院情報学環共催
企画展示のお知らせ
- 21 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス” 各種コース実施の
お知らせ

22 EVENT LIST

淡青評論

- 24 情報社会の現代

◆ 表紙写真 ◆

創立130周年記念事業
シンボルマーク・キャラクター応募作品
(2ページに関連記事)

〔訂正〕

「学内広報」において、一部誤りがありましたので訂正
します。

関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

No.1350 (2007.1.17)

2ページ下

東京大学創立130周年記念事業シンボルマーク受賞者名

誤：築紫 一夫さん

正：筑紫 一夫さん

編集後記

前号の編集後記で先輩から「フレッシュな新人」と呼ばれていましたが、早いものであと2ヶ月もすれば社会人2年生。後輩も入ってくるし、早く一人前の編集者にならなければ！とプレッシャーを感じる今日この頃です。でも、たとえどんなに仕事に慣れたとしても、気持ちはいつだってフレッシュなままでいたいですね。これからも新鮮な記事が詰まった学内広報をみなさんにお届けしますので、どうぞできたてをお楽しみください☆ (あ)



七徳堂鬼瓦

情報社会の現代

生物のたいていの遺伝子はその機能が失われると個体の能力が低下することが多いが、マウスを使った実験で、機能をダメにすると頭が良くなる（記憶力が上がる）遺伝子が報告されている。人間でも、想像を絶する記憶力を発揮したり天才的な芸術的才能を備えたサヴァン症候群とよばれる人が稀にいる。映画「レインマン」のモデルとなっている実在の人物は、9000冊もの本の文章を正確に覚えているという。モーツァルトもサヴァン症候群だったとか。世の中、そんな驚異的に頭がいい人があふれていないのは、頭が良すぎると生きるためにはむしろ不都合を生じるからであろう。

たとえば、昔の出来事よりも最近の出来事に重点をおいて行動した方がより実益的だとか危険を回避できる確率が高いとかいうように。天才が短命なのはこのせいかも知れない。とすると、凡人は積極的に忘れるように敢えて頭が悪くなっていることになる。はたして頭がよろしくない我々が一角のことを成し遂げるにはどうしたらよいのだろうか。独創的な分野では意識を集中させることが大切であり、人は好きなことに熱中したときにものごとを達成できることも経験的に知っている。

情報社会の現代において、どんな情報も自由に手に入る反面、あふれる情報に大事な限られた意識が奪われがちになっている。ネットに繋がったコンピュータの前で仕事をしていると、押し寄せるメールの山と、無限の広がりを見せるウェブ検索の海のなかで、主体的な思考が迷子になってしまうことがある。携帯電話もしかり。少し前になるが、ロンドンの研究所で過ごしていた2年間は日本のメディアも含めて多くの情報から遠ざかっていたが、大した不都合を感じなかった。逆に、その2年間に必要最小限の情報のもとにじっくり考え経験したことは、今でも研究の大きな糧として自分の中に息づいている。我々が超人的な記憶力や情報処理能力を持ち合わせていないという現実において、ややもすると情報が過ぎたるは及ばざるがごとしになってしまっていないだろうか。大学あるいは大学院のような専門教育の場でも、何を教え何を学びたいかを明確に意識することの重要性を感じる。

渡邊 嘉典（分子細胞生物学研究所）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1351 2007年1月31日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>